

審 議 事 項

件名・議案	提案者	資料 (頁)	提案理由等 (※シンポジウム等、後援関係については概要を記載)	説明者	
I 審議事項					
1. 規則関係					
提案1	「特任連携会員の推薦様式について」の一部を改正すること	科学者委員会委員長	B(7-8)	特任連携会員の推薦様式について、様式の一部項目を修正するため。	三成副会長
提案2	「産学官連携功労者表彰要領」を改正すること	会長	B(9-11)	「産学官連携功労者表彰」が、平成30年度から、名称・制度内容ともに変更されることとなり、新制度「日本オープンイノベーション大賞」に即した規定に改正する必要があるため。	会長
2. 委員会関係					
提案3	(幹事会附置委員会) 日本の展望2020検討委員会 (1)設置及び運営要綱の決定 (2)委員会委員の決定(新規1件)	会長	B(13-14)	我が国の学術の長期展望に関する事項について審議するため、日本学術会議会則第25条第1項の幹事会附置委員会として委員会の設置及び運営要綱を決定するとともに、委員会の委員を決定する必要があるため。	会長
提案4	(幹事会附置委員会) 財務委員会 (1)設置及び運営要綱の決定	会長	B(15)	日本学術会議に係る予算執行のうち重要な事項について審議するため、日本学術会議会則第25条第1項の幹事会附置委員会として委員会の設置及び運営要綱を決定する必要があるため。	会長
提案5	(機能別委員会) 科学者委員会 (1)運営要綱の一部改正(分科会の設置1件) (2)分科会等委員の決定(新規2件)	(1)科学者委員会委員長 (2)会長	B(17-20)	分科会の設置に伴い、運営要綱を一部改正するとともに、分科会等の委員を決定する必要があるため。	三成副会長
提案6	(分野別委員会) (1)運営要綱の一部改正(名称の変更1件) (2)委員会及び分科会委員の決定(【委員会及び分科会】新規1件、追加2件)	(1)食料科学委員会委員長、基礎医学委員会委員長、薬学委員会委員長、機械工学委員会委員長 (2)各部部长	B(21-23)	小委員会の名称変更に伴い、運営要綱を一部改正するとともに、分野別委員会における委員等を決定する必要があるため。	会長 各部部长

提案7	(課題別委員会) 人口縮小社会における問題解決のための検討委員会 (1)委員会委員の決定(追加1件)	(1)会長	B(25)	人口縮小社会における問題解決のための検討委員会における委員を決定する必要があるため。	渡辺副会長
提案8	(課題別委員会) 認知障害に関する包括的検討委員会 (1)委員会委員の決定(追加1件)	(1)会長	B(27)	認知障害に関する包括的検討委員会における委員を決定する必要があるため。	平井第二部副部長

3. 提言等関係

提案9	提言「知識集約型社会の拠点となる大学のあり方—2025年までに達成する社会変革—」について日本学術会議会則第2条第3号の「提言」として取り扱うこと	科学と社会委員会	C(1-25)	科学と社会委員会政府・産業界連携分科会において、提言を取りまとめたので、関係機関等に対する提言として、これを外部に公表したいため。 ※科学と社会委員会査読	渡辺副会長
提案10	提言「サマータイム導入の問題点：健康科学からの警鐘」について日本学術会議会則第2条第3号の「提言」として取り扱うこと	基礎生物学委員会委員長、基礎医学委員会委員長、臨床医学委員会委員長	C(27-52)	基礎生物学委員会・基礎医学委員会・臨床医学委員会合同生物リズム分科会において、提言を取りまとめたので、関係機関等に対する提言として、これを外部に公表したいため。 ※第二部査読	生物リズム分科会 深田吉孝副委員長、本間さと委員

4. 協力学術研究団体関係

提案11	日本学術会議協力学術研究団体を指定すること	会長	B(29)	日本学術会議協力学術研究団体への新規申込のあった下記団体について、科学者委員会の意見に基づき、指定することとしたい。 ①日本児童英語教育学会 ②日本秦漢史学会 ③日本ナレッジ・マネジメント学会 ④日本バスケットボール学会 ※平成30年10月25日現在2,033団体(上記申請団体を含む)	三成副会長
------	-----------------------	----	-------	---	-------

5. 国際関係

提案12	平成30年度フューチャー・アースに関する国際会議への派遣方針に基づく、派遣会議及び会議派遣者を決定すること	会長	B(31-32)	平成30年度フューチャー・アースに関する国際会議等への代表者の派遣方針に基づき、派遣会議及び会議派遣者を決定する必要があるため。 ※国際委員会10月24日承認、同フューチャー・アースの国際的展開対応分科会10月13日承認	武内副会長
------	---	----	----------	--	-------

6. シンポジウム等

提案13	公開シンポジウム 「LGBT/SOGI施策の あり方―国・自治体 は何をすべきか (仮)」	法学委員 会委員 長、社会 学委員会 委員長	B(33- 34)	主催：日本学術会議法学委員会社会 と教育におけるLGBTIの権利保障分科 会、日本学術会議社会学委員会ジェ ンダー政策分科会 日時：平成30年12月19日 (水) 13:30～18:00 場所：日本学術会議講堂 ※第一部承認	
提案14	公開シンポジウム 「植物保護科学の SDGsへの貢献」	農学委員 会委員長	B(35- 36)	主催：日本学術会議農学委員会植物 保護科学分科会 日時：平成30年12月1日(土) 13:00～17:30 場所：東京大学農学部1号館8番教 室 ※第二部承認	—
提案15	公開シンポジウム 「先端的フェノタイ ピング技術の農作物 生産への実装」	農学委員 会委員 長、食料 科学委員 会委員長	B(37- 38)	主催：日本学術会議農学委員会農業 生産環境工学分科会、日本学術会議 農学委員会・食料科学委員会合同農 業情報システム学分科会 日時：平成30年12月18日(火) 13:00～16:00 場所：豊橋技術科学大学キャンパス A-101教室 ※第二部承認	—
提案16	公開シンポジウム 「アフリカ豚コレ ラ：家畜に壊滅的被害をもたらす、食料 生産への脅威となる 感染症～」	農学委員 会委員 長、食料 科学委員 会委員長	B(39- 40)	主催：日本学術会議食料科学委員会 獣医学分科会、日本学術会議農学委 員会・食料科学委員会合同食の安全 分科会、日本学術会議食料科学委員 会畜産学分科会 日時：平成30年12月28日(金) 13:30～16:30 場所：日本学術会議講堂 ※第二部承認	—
提案17	公開シンポジウム 「ハイパワーレー ザーによる高エネル ギー密度科学技術の 展望」	総合工学 委員会委 員長	B(41- 43)	主催：日本学術会議総合工学委員会 エネルギーと科学技術に関する分科 会 日時：平成31年1月23日(水)～24日 (木) 場所：Japan Embassy, Washington D.C. USA ※第三部承認	—
提案18	公開シンポジウム 「ロボットのシステ ムインテグレーション」	機械工学 委員会委 員長	B(45- 46)	主催：日本学術会議機械工学委員会 ロボット学分科会 日時：平成30年12月13日(木) 13: 30～17:00 場所：大阪工業大学梅田キャンパス セミナ204室 ※第三部承認	—

提案19	公開シンポジウム 「第89回日本学術会議-日本衛生学会共催シンポジウム」	健康・生活科学委員会委員長、環境学委員会委員長	B(47-49)	主催：日本学術会議健康・生活科学委員会、環境学委員会合同環境リスク分科会 日時：平成 31年2月 3日（日）13:20～15:20 場所：名古屋大学東山キャンパス ※第三部承認	—
提案20	公開シンポジウム 「第92回日本学術会議-日本産業衛生学会共催シンポジウム」	健康・生活科学委員会委員長、環境学委員会委員長	B(51-52)	主催：日本学術会議健康・生活科学委員会、環境学委員会合同環境リスク分科会 日時：平成 31年5月25日（土）13:00～15:00 場所：名古屋国際会議場 ※第三部承認	—
提案21	公開シンポジウム 「第8回計算力学シンポジウム」	総合工学委員会委員長、機械工学委員会委員長	B(53-55)	主催：日本学術会議総合工学委員会・機械工学委員会合同計算科学シミュレーションと工学設計分科会 日時：平成30年12月12日（水）10:00～17:30 場所：日本学術会議講堂 ※第三部承認	—
提案22	公開シンポジウム 「健康寿命を延ばす新しいサイエンス～身体と細胞のアプローチ」	総合工学委員会委員長、機械工学委員会委員長	B(57-58)	主催：日本学術会議総合工学委員会・機械工学委員会合同計算科学シミュレーションと工学設計分科会 日時：平成31年1月25日（金）10:00～17:00 場所：日本学術会議講堂 ※第三部承認	—
提案23	公開シンポジウム 「海洋観測における研究船の役割：成果と展望」	地球惑星科学委員会委員長	B(59-61)	主催：日本学術会議地球惑星科学委員会SCOR分科会 日時：平成30年12月25日（火）13:00～17:00 場所：日本学術会議講堂 ※第三部承認	—
提案24	公開シンポジウム 「第4回理論応用力学シンポジウム」	総合工学委員会委員長、機械工学委員会委員長	B(63-64)	主催：日本学術会議総合工学委員会・機械工学委員会合同力学基盤工学分科会 日時：平成31年1月23日（水）13:00～17:00 場所：日本学術会議講堂 外1室 ※第三部承認	—
提案25	公開シンポジウム 「野生動物と共に生きる未来-持続可能な野生動物管理システムの構築をめざして」	人口縮小社会における野生動物管理のあり方の検討に関する委員会委員長	B(65-66)	主催：日本学術会議課題別委員会人口縮小社会における野生動物管理のあり方の検討に関する委員会 日時：平成31年2月9日（土）13:00～16:30 場所：兵庫県公館 大会議室	—
提案26	日本学術会議九州・沖縄地区会議主催学術講演会「熊本地震の復興に貢献する熊本大学の学術研究」の開催について	科学者委員会委員長	B(67-68)	主催：九州・沖縄地区会議、熊本大学 日時：平成31年2月27日（水）14:00～16:25 場所：熊本大学工学部百周年記念館（熊本市）	—

8. 後援

提案27	国際会議の後援をすること	会長	B(69)	以下の国際会議について、講演の申請があり、国際委員会において審議を行ったところ、適当である旨の回答があったので、後援することとしたため。 ①政府に対する科学的助言に関する国際ネットワーク第3回会合 (INGSA2018) 主催：政府に対する科学的助言に関する国際ネットワーク(INGSA)、国立研究開発法人科学技術振興機構、国立大学法人政策研究大学院大学 期間：平成30年11月6日(火)～7日(水) (2日間) 場所：国立大学法人政策研究大学院大学(東京都港区) 参加予定国数：40か国・地域 申請者：国立研究開発法人 科学技術振興機構理事長 濱口道成 ②IEEE WIE International Leadership Summit 2018 Tokyo 主催：IEEE Japan Council Women in Engineering Affinity Group (IEEE JC WIE) 期間：平成30年11月9日(金)～10日(土) (2日間) 場所：芝浦工業大学芝浦キャンパス(東京都港区) 参加予定国数：6か国・地域 申請者：IEEE Japan Council Women in Engineering Affinity Group (IEEE WIE ILS Tokyo Committee) Chair 野田 夏子 ※国際委員会10月24日承認、同国際会議主催等検討分科会10月12日承認	会長
提案28	国内会議の後援をすること	会長	—	以下の会議について、後援の申請があり、関係する部に審議付託したところ、適当である旨の回答があったので、後援することとした。 ①第42回人間—生活環境系シンポジウム 主催：人間—生活環境系学会 期間：平成30年12月8日(土)～9日(日) 場所：摂南大学寝屋川キャンパス 5号館 552教室 参加予定者数：約100名 申請者：人間—生活環境系学会会長 松原斎樹 ※第二部、第三部承認	会長

			②平成30年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会 主催：公益社団法人日本獣医師会 期間：平成31年2月8日(金)～10日(日) 場所：新横浜プリンスホテル 参加予定者数：約2,500名 申請者：公益社団法人日本獣医師会 会長 藏内勇夫 ※第二部承認 ③日本地球惑星科学連合2019年大会 主催：公益社団法人日本地球惑星科学連合 期間：平成31年5月26日(日)～30日(木) 場所：幕張メッセ 国際会議場、国際展示場 東京ベイ 幕張ホール 参加予定者数：7,968名(昨年実績) 申請者：公益社団法人日本地球惑星科学連合会長 川幡穂高 ※第三部承認	
--	--	--	---	--

Ⅱ その他

件名		資料
1.	今後の総会及び幹事会開催予定 次回幹事会は11月29日(木)13時30分開催	参考1
2.	高木学校からの要望について (1) 前回回答の報告 (2) 公開討論会開催に向けて再度のお願いに対する回答について (3) 回答に対する再要請について	参考2
3.	原子力市民委員会からの再要望について	参考3

提案 1

○特任連携会員の推薦様式について（平成24年1月27日日本学術会議第144回幹事会決定）の一部を次のように改正する。

改 正 後		改 正 前	
(略) 様式 1 (略) (表3) 選考要件についての説明 ※国際会議への代表派遣の場合、表3は記入不要		(略) 様式 1 (略) (表3) 選考要件についての説明 ※国際会議への代表派遣の場合、表3は記入不要	
氏名	理由説明 ※特任連携会員を推薦するにあたり、下記の点を明確にして、理由を説明してください。 <u>①～④は必須、⑤は該当する場合のみ</u> ①当該特任連携会員なしでは十分な審議が困難である理由 ②会員、連携会員の中に、同等の専門家がないことについて ③候補者の任期 ④現時点での当該委員会・分科会における特任連携会員の数（比率） ⑤（国際の場合）国際関係団体との関係	氏名	理由説明 ※特任連携会員を推薦するにあたり、下記の点を明確にして、理由を説明してください。 ①当該特任連携会員なしでは十分な審議が困難である理由 ②会員、連携会員の中に、同等の専門家がないことについて ③候補者の任期 ④現時点での当該委員会・分科会における特任連携会員の数（比率） ⑤（国際の場合）国際関係団体との関係
特段の事情 ※「委員会及び分科会等に係る特任連携会員の選考の在り方について」 <u>（日本学術会議第142回幹事会決定）第2（3）イに該当する事情がある場合、記載してください。</u>		(新規追加)	
注1) (略)		注1) (略)	

注2) 特任連携会員は一般の連携会員を補完するという位置づけであることに鑑み、その総数は一般の連携会員と特任連携会員を合わせた数の10%程度を上限とし、抑制的に運用する。

注3) 委員構成に占める特任連携会員の割合は、それぞれ次に掲げる人数を超えないものとする。

(ア) 分野別委員会及び同委員会に置かれる分科会等 1名(特段の事情がある場合には、2名)

(イ) 幹事会の附置委員会、課題別委員会及びこれらの委員会に置かれる分科会等並びに機能別委員会に置かれる分科会等並びに若手アカデミー及び同アカデミーに置かれる分科会 委員数の5分の1に相当する数又は10人のいずれか少ない数(特段の事情がある場合には、委員数の2分の1に相当する数又は10人のいずれか少ない数)

注2) 特任連携会員の総数は一般の連携会員と特任連携会員を合わせた数の10%程度を上限とし、抑制的に運用することとされていることを考慮した上で、理由説明を記載する。

附則(平成30年10月25日日本学術会議第271回幹事会決定)
この決定は、決定の日から施行する。

提案 2

○産学官連携功労者表彰要領（平成 22 年 5 月 27 日日本学術会議第 96 回幹事会決定）を次のように改正する。次表により、改正前欄に掲げる規定の傍線を付した部分をこれに対応する改正後欄に掲げる規定の傍線を付した部分のように改める。

改 正 後	改 正 前
●<u>日本オープンイノベーション大賞</u> 要領 〔平成 22 年 5 月 27 日 日本学術会議第 96 回幹事会決定〕 （目的） 第 1 <u>学術の視点から、産学官金等の各主体</u>における <u>連携を含むオープンイノベーション等の科学技術イノベーション創出に係る活動</u>において、<u>先導的又は独創的な取組の実施等（以下「取組等」という。）</u>を通じ、<u>当該活動の推進に多大な貢献し、若しくは他の模範となることが期待される事例</u> <u>又は着想等</u>を称えることにより、我が国の <u>科学技術イノベーション創出に係る活動</u>の更なる進展に寄与することを目的とする。 （表彰の対象） 第 2 表彰は、<u>科学技術イノベーション創出に係る活動のうち、次の各号の一の分野において、学術の視点から特に顕著な取組等が認められる個人又は団体</u>に対して行う。 （1）<u>連携の工夫や仕組みづくり等において優良な事例又は着想</u> （2）<u>将来の社会や産業の在り方に革新をもたらすこと等が期待される事例又は着想</u> <u>（削除）</u> <u>（削除）</u>	●<u>産学官連携功労者表彰</u> 要領 〔平成 22 年 5 月 27 日 日本学術会議第 96 回幹事会決定〕 （目的） 第 1 <u>大学等（公的研究機関を含む。以下同じ。）</u>、<u>企業等</u>における <u>産学官連携活動</u>において <u>大きな成果を収め、また、先導的な取組を行う等</u> <u>当該活動の推進に多大な貢献をした産学官連携の優れた成功事例</u>に関し、その功績を称えることにより、我が国の <u>産学官連携活動</u>の更なる進展に寄与することを目的として、<u>年 1 回開催される産学官連携推進会議において実施</u>する。 （表彰の対象） 第 2 表彰は、次の各号の一の分野において、学術の視点から特に顕著な <u>功績又は功労があったと認められる者（個人又はグループ・団体）</u>に対して行う。 （1）<u>企業等と大学等との共同研究・受託研究等による成果の事例</u> （2）<u>大学等の研究成果である特許・ノウハウの企業等へ技術移転を行い製品化した成果の事例</u> （3）<u>大学等の研究開発成果を活用したベンチャー創出等の成果の事例</u> （4）<u>地域における産学官連携による成果の事例</u>

(3) その他 <u>科学技術イノベーション創出に係る活動の推進に資する事例又は着想等</u> (表彰者) 第3 日本学術会議会長（以下「会長」という。） (表彰の方法) 第4 表彰状 (被表彰者の選考時期) 第5 <u>被表彰者の選考</u> は、年1回行う。 (被表彰者の決定) 第6 <u>公募（自薦及び他薦）により集められた候補者のうちから、別に定める選考委員会等</u>の意見を聴いて、会長が、被表彰者を決定する。 会長は、被表彰者の決定後、速やかに幹事会にその旨を報告するものとする。 (表彰の事務) 第7 表彰に関する事務は、日本学術会議事務局において行う。 <u>日本学術会議事務局は、表彰に関し必要があると認めるときは、関係機関に対し、意見の聴取その他の必要な協力を求めることができる。</u>	(5) その他 <u>産学官連携による優れた成果の事例</u> (表彰者) 第3 日本学術会議会長（以下「会長」という。） (表彰の方法) 第4 表彰状 <u>及び記念品</u> (表彰の時期) 第5 <u>表彰</u> は、年1回行う。 (被表彰者の決定) 第6 <u>関係府省より推薦された候補者のうちから、内閣府に設置される選考委員会</u>の意見を聴いて、会長が、被表彰者を決定する。 会長は、被表彰者の決定後、速やかに幹事会にその旨を報告するものとする。 (表彰の事務) 第7 表彰に関する事務は、<u>関係府省の協力を得て、日本学術会議事務局</u>において行う。
--	--

<u>(実施要領)</u> <u>第 8 この要領に定めるもののほか、本要領の実施に関して必要な事項は幹事会で定める。</u> (その他) <u>第 9 この表彰は、平成 3 4 年 までの間、実施することとする。なお、我が国の科学技術イノベーション創出に係る活動を取り巻く状況を踏まえ、必要に応じて運用の見直し等を行う。</u>	(その他) 第 8 この表彰は、<u>平成 1 5 年から平成 2 9 年 までの間、実施することとする。</u>
---	---

附則（平成 3 0 年 1 0 月 2 5 日日本学術会議第 2 7 1 回幹事会決定）
この決定は、決定の日から施行する。

●日本の展望 2020 検討委員会運営要綱（案）

（平成 30 年 月 日）
日本学術会議第 回幹事会決定

（設置）

第 1 日本の展望 2020 検討委員会（以下「委員会」という。）は、日本学術会議会則第 25 条第 1 項に基づく委員会として幹事会に附置する。

（任務）

第 2 委員会は、各学術分野の発展のあり方、及びそれを踏まえた地球的課題に応える研究のあり方など我が国の学術の長期展望に関する事項について審議する。

（組織）

第 3 委員会は、幹事会構成員及び 6 名程度の会員又は連携会員をもって組織する。

（設置期限）

第 4 委員会は、平成 32 年 9 月 30 日まで置かれるものとする。

（庶務）

第 5 委員会の庶務は、事務局各課・参事官の協力を得て、事務局企画課及び参事官（審議第二担当）において処理する。

（雑則）

第 6 この要綱に定めるもののほか、議事の手続その他委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附 則

この決定は、決定の日から施行する。

【幹事会附置委員会】

○委員の決定（新規１件）

（日本の展望２０２０検討委員会）

氏 名	所 属 ・ 職 名	備 考	推 薦
遠藤 薫	学習院大学法学部教授	第一部会員	第一部
宮崎 恒二	東京外国語大学名誉教授	第一部会員	第一部
佐治 英郎	京都大学特任教授 京都大学名誉教授	第二部会員	第二部
澁澤 栄	東京農工大学大学院農学研究院教授	第二部会員	第二部
野尻 美保子	高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所・教授	第三部会員	第三部
渡辺 芳人	名古屋大学・理事、副総長	第三部会員	第三部

●財務委員会設置要綱（案）

〔平成 30 年 月 日〕
〔日本学術会議第 回幹事会決定〕

（設置）

第 1 財務委員会（以下「委員会」という。）は、日本学術会議会則第 25 条第 1 項に基づく委員会として幹事会に附置する。

（任務）

第 2 委員会は、日本学術会議に係る予算執行のうち重要な事項について審議する。

（組織）

第 3 委員会は、副会長及び各部の部長をもって組織する。

（設置期限）

第 4 委員会は、平成 32 年 9 月 30 日まで置かれるものとする。

（庶務）

第 5 委員会の庶務は、事務局各課・参事官の協力を得て、事務局管理課において処理する。

（雑則）

第 6 この要綱に定めるもののほか、議事の手続その他委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附 則

この決定は、決定の日から施行する。

○科学者委員会運営要綱（平成 17 年 10 月 4 日日本学術会議第 1 回幹事会決定）の一部を次のように改正する。

改 正 後				改 正 前			
(略)				(略)			
(分科会)				(分科会)			
第 2 委員会に、次の表のとおり分科会を置く。分科会の設置期限は当該期末までとし、委員長は期首及び適時に分科会の設置について幹事会に提案する。				第 2 委員会に、次の表のとおり分科会を置く。分科会の設置期限は当該期末までとし、委員長は期首及び適時に分科会の設置について幹事会に提案する。			
分 科 会	調査審議事項	構 成	備 考	分 科 会	調査審議事項	構 成	備 考
(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)
研究評価分 科会	<u>1. 研究評価のあり方 についての全体的検討</u> <u>2. 関連する過去の提 言等のフォローアップ</u> <u>3. 国内外の研究評価 のあり方についての調 査</u> <u>4. 分野別研究評価の あり方についての検討</u> <u>5. 若手支援としての 研究評価のあり方につ いての検討</u> <u>に係る審議に関するこ と</u>	<u>20 名以内の会 員又は連携会員</u>	設 置 期 間：平成 30 年 10 月 25 日 ～平成 32 年 9 月 30 日		<u>(新規設置)</u>		
(略)				(略)			

附則（平成 30 年 10 月 25 日日本学術会議第 271 回幹事会決定）
この決定は、決定の日から施行する。

科学者委員会分科会の設置について

分科会等名： 研究評価分科会

1	所属委員会名 (複数の場合は、主体となる委員会に○印を付ける。)	科学者委員会
2	委員の構成	20名以内の会員又は連携会員
3	設置目的	研究評価の目的は、研究の質を保証し、研究自体を支援・活性化することにある。それゆえ、研究評価は、専門家による評価（peer review：科学者コミュニティ内部の自律的な相互評価）を原則とし、研究機関や研究者が社会に対して負う説明責任の一環として機能してきた。 しかし、分野によっては評価指標の設定が難しいなどの理由で、十分に効果を持ち、かつ第三者、社会に説明できる自己点検評価制度になっていない場合がある。また、近年強まっている専門家集団以外による研究評価（外部評価）は、数値的指標や短期的指標になじまない研究分野、あるいは、既存の評価指標があてはまりにくい学際的・融合的新領域には不利に働きやすい。若手研究者などが、評価に反映されやすいテーマや発表形式を選ばざるをえない状況に追い込まれ、長期的視野に立った独創的研究に取り組みにくいとの指摘もある。2012年提言が指摘したように、複数の評価が乱立して、「評価疲れ」も明らかである。 以上のような現状に照らし、研究評価のあり方について検討することが本分科会の目的である。学術会議の過去の提言をふまえ、国内外の評価のあり方を調査しつつ、全体的な課題を整理して、分野別研究評価のあり方や若手支援につながる研究評価のあり方について検討する。
4	審議事項	1. 研究評価のあり方についての全体的検討 2. 関連する過去の提言等のフォローアップ 3. 国内外の研究評価のあり方についての調査 4. 分野別研究評価のあり方についての検討 5. 若手支援としての研究評価のあり方についての検討に係る審議に関すること
5	設置期間	平成30年10月25日～平成32年9月30日
6	備考	※24期にて初設置

【機能別委員会】

○委員の決定（新規２件）

（科学者委員会男女共同参画分科会アンケート検討小分科会）

氏 名	所 属 ・ 職 名	備 考	推 薦
佐藤 嘉倫	東北大学大学院文学研究科副研究科長・教授	第一部会員	副会長
永瀬 伸子	お茶の水女子大学 基幹研究院教授・学長補佐	第一部会員	第一部
三成 美保	奈良女子大学副学長・教授（研究院生活環境科学系）	第一部会員 副会長	第一部
若尾 政希	一橋大学大学院社会学研究科教授	第一部会員	第一部
熊谷 日登美	日本大学生物資源科学部教授	第二部会員	第二部
望月 眞弓	慶應義塾大学病院薬剤部長、慶應義塾大学薬学部薬学研究科教授	第二部会員	第二部
野尻 美保子	高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所教授	第三部会員	第三部
藤井 良一	大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構長	第三部会員	第三部
山口 周	東京大学大学院工学系研究科教授	第三部会員	第三部
井野瀬 久美恵	甲南大学文学部教授	連携会員	第一部
川口 慎介	国立研究開発法人海洋研究開発機構研究員	連携会員	副会長
工藤 眞由美	大阪大学理事・副学長	連携会員	副会長

（科学者委員会研究評価分科会）

氏 名	所 属 ・ 職 名	備 考	推 薦
小林 傳司	大阪大学教授・理事・副学長	第一部会員	副会長
松下 佳代	京都大学高等教育研究開発推進センター教授	第一部会員	第一部
溝端 佐登史	京都大学経済研究所長・教授	第一部会員	第一部
三成 美保	奈良女子大学副学長・教授（研究院生活環境科学系）	第一部会員 副会長	副会長
遠藤 玉夫	地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター研究所所長代理	第二部会員	第二部
武田 洋幸	東京大学大学院理学系研究科長・教授	第二部会員 第二部幹事	副会長

古谷 研	創価大学大学院工学研究科教授、東京大学特任教授	第二部会員	第二部
藤井 良一	大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構長	第三部会員	副会長
相田 美砂子	広島大学理事・副学長	第三部会員	第三部
松尾 由賀利	法政大学理工学部教授	第三部会員	第三部
高瀬 堅吉	自治医科大学大学院医学研究科教授	連携会員	副会長
松中 学	名古屋大学大学院法学研究科准教授	連携会員	副会長

分野別委員会運営要綱(平成26年8月28日日本学術会議第199回幹事会決定)の一部を次のように改正する。

改 正 後					改 正 前				
別表第1					別表第1				
分野別委員会	分科会等	調査審議事項	構成	設置期間	分野別委員会	分科会等	調査審議事項	構成	設置期間
(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)
食料科学委員会	(略)	(略)	(略)	(略)	食料科学委員会	(略)	(略)	(略)	(略)
	食料科学委員会・基礎医学委員会・薬学委員会合同毒性学分科会	薬学委員会に記載	薬学委員会に記載	薬学委員会に記載		食料科学委員会・基礎医学委員会・薬学委員会合同トキシコロジー分科会	薬学委員会に記載	薬学委員会に記載	薬学委員会に記載
(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)
基礎医学委員会	(略)	(略)	(略)	(略)	基礎医学委員会	(略)	(略)	(略)	(略)
	食料科学委員会・基礎医学委員会・薬学委員会合同毒性学分科会	薬学委員会に記載	薬学委員会に記載	薬学委員会に記載		食料科学委員会・基礎医学委員会・薬学委員会合同トキシコロジー分科会	薬学委員会に記載	薬学委員会に記載	薬学委員会に記載
(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)
薬学委員会	(略)	(略)	(略)	(略)	薬学委員会	(略)	(略)	(略)	(略)
	食料科学委員会・基礎医学委員会・薬学委員会合同毒性学分科会	薬学系、農学系、医学系の研究者と、医薬品および安全性に係る審議に関すること	20名以内の会員又は連携会員	平成29年10月30日～平成32年9月30日		食料科学委員会・基礎医学委員会・薬学委員会合同トキシコロジー分科会	薬学系、農学系、医学系の研究者と、医薬品及び安全性に係る審議に関すること	20名以内の会員又は連携会員	平成29年10月30日～平成32年9月30日
(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)	(略)

この決定は、決定の日から施行する。

食料科学委員会・基礎医学委員会・薬学委員会合同分科会の名称変更について

分科会等名：毒性学分科会

1	所属委員会名 (複数の場合は、主体となる委員会に○印を付ける。)	食料科学委員会 基礎医学委員会 ○薬学委員会
2	委員の構成	20名以内の会員または連携会員
3	設置目的	健康な生活を送るためには、様々な物質の健康に対する影響を考慮する必要がある。医薬品や食品は人体にとって良い影響を与えると同時に、使用法を誤ると毒性を示す可能性がある。また、様々な環境汚染物質なども問題となっており、それらの影響、特に複合的な作用については解明されていないことも多い。このような現状に鑑み、トキシコロジーの領域の薬学、農学、基礎医学研究者の連携をはかるとともに研究を推進する。 本分科会は、研究連絡委員会の時代から、歴史的に日本毒性学会（現）との関係が深い。当初の学会名が日本毒科学会であって、本分科会の前身も毒科学研連と称していた。その後、この「毒科学」という名称が一般の人々に近寄りやすい印象を与えているとの判断から、日本トキシコロジー学会に改名した。それに連動してこの分科会の名もトキシコロジー分科会に変更された経緯がある。その後、学会では、その再評価において、カタカナにした効果がはっきりせず、一般の人々にとって相変わらず分かり難いということ、及び、一般的に「毒性」の方が馴染みが良いという判断により、日本毒性学会に名称が変更された。本分科会の名称に対しても同様の考察が該当するとの判断から、毒性学分科会に名前を変更することとした。これにより、同学会との連携を含めた本分科会の今後の活動が、共通の名称、用語を用いる点において、より円滑になると期待される。
4	審議事項	薬学系、農学系、医学系の研究者と、医薬品及び食品等の毒性及び安全性に関する審議に関すること
5	設置期間	平成29年10月30日～平成32年9月30日
6	備考	※分科会名称の変更（「トキシコロジー分科会」を「毒性学分科会」に変更）

【委員会及び分科会】

○委員の決定（新規 1 件）

（電気電子工学委員会通信・電子システム分科会 I C T 分野の魅力・興味基軸の分析と創造小委員会）

氏 名	所 属 ・ 職 名	備 考
佐古 和恵	日本電気株式会社セキュリティ研究所技術特別主幹	連携会員
仙石 正和	事業創造大学大学院大学学長・教授	連携会員
中野 美由紀	産業技術大学大学院大学情報アーキテクチャ専攻教授	連携会員
原田 博司	京都大学大学院情報学研究科通信情報システム専攻教授	連携会員
森川 博之	東京大学大学院工学系研究科教授	連携会員
山中 直明	慶応義塾大学理工学部情報工学科教授	連携会員

○委員の追加（追加 2 件）

（農学委員会・食料科学委員会合同食の安全分科会）

氏 名	所 属 ・ 職 名	備 考
佐藤 れえ子	岩手大学農学部教授	連携会員

（健康・生活科学委員会・歯学委員会合同脱タバコ社会の実現分科会）

氏 名	所 属 ・ 職 名	備 考
永田 知里	岐阜大学大学院医学系研究科教授	連携会員

【課題別委員会】

○委員の決定（追加 1 件）

（人口縮小社会における問題解決のための検討委員会）

氏 名	所 属 ・ 職 名	備 考	推 薦
白藤 博行	専修大学法学部教授	第一部会員	第一部

【課題別委員会】

○委員の決定（追加 1 件）

（認知障害に関する包括的検討委員会）

氏 名	所 属 ・ 職 名	備 考	推 薦
積山 薫	京都大学大学院総合生存学館教授	連携会員	第一部

日本学術会議協力学術研究団体への新規申し込み団体の概要

	団体名	概 要
1	日本児童英語教育学会	本団体は、主として幼児・児童を対象とする英語教育について理論及び方法を検討するものである。1980年の設立以来、大会等を通じて、日本における関連の問題の研究・解決や児童英語教育の発展に取り組んでいる。
2	日本秦漢史学会	本団体は、日本における秦漢史研究の発展を主たる目的としていたと同時に、中国・秦漢史研究会など、関連分野の海外における学会等と密接な関係を保持し、研究情報の共有の実現・相互の研究の進展を図るものである。
3	日本ナレッジ・マネジメント学会	企業経営は、幅広いナレッジと深淵なウィズダムが全ての判断と洞察の根底になれば乗り切れない。 本団体は、人間のナレッジをいかに有効に役立てていくかについて理論体系を確立することを目指すものである。
4	日本バスケットボール学会	本団体は、バスケットボールの強化・普及の両側面から競技力向上に資することを目的としている。 バスケットボールに関する運動方法学、技術論、戦術論、歴史、コーチング論、生理学、哲学、バイオメカニクス、教育学、心理学、経営学、社会学に至るまで、バスケットボールに関わるあらゆる研究を取り扱うことを目指している。

平成 30 年度フューチャー・アースに関する国際会議等への代表者の派遣

番号	国際会議等	会 期		開催地及び用務地	派遣候補者 (職名)	備 考
			計			
1	SDGs とフューチャー・アースの 展望に関するワークショップ	11 月 16 日 ～ 11 月 17 日	2 日	韓国 ―― 済州島	春日 文子 連携会員 (国立研究開発法人国立環境研究所特任フェロー)	第 3 区分
2	フューチャー・アースフィリピン国内委員会発足式	11 月 19 日	1 日	フィリピン ―― マニラ	春日 文子 連携会員 (国立研究開発法人国立環境研究所特任フェロー)	第 2 区分
3	フューチャー・アース事務局幹部会合	11 月 27 日 ～ 11 月 28 日	2 日	スウェーデン ―― ストックホルム	春日 文子 連携会員 (国立研究開発法人国立環境研究所特任フェロー)	第 1 区分

※平成 30 年度フューチャー・アースに関する国際会議等への代表者の派遣の基本方針(平成 30 年 2 月 22 日日本学術会議第 260 回幹事会決定)に基づく区分

【参考】

平成 30 年度フューチャー・アースに関する国際会議等への代表者の派遣の基本方針

〔 平成 30 年 2 月 22 日
日本学術会議第 260 回幹事会決定 〕

国際学術プログラムであるフューチャー・アース（以下「フューチャー・アース」という。）の推進を図るため、日本学術会議の行う国際学術交流事業の実施に関する内規（以下「内規」という。）に基づき、平成 30 年度におけるフューチャー・アースに関する国際会議等への代表者の派遣の基本方針を以下のとおり定める。

フューチャー・アースにおいては、日本学術会議が日本の代表機関として国際本部事務局の機能（日本支部）の一部を担っていること、また、日本学術会議連携会員が国際本部事務局日本支部事務局長を務めていることから、平成 30 年度の内規第 51 条の各区分における国際会議等への代表者の派遣は下記の考えに基づいて行う。

(1) 第 1 区分

- ・フューチャー・アースの国際的な推進体制の中心である諮問委員会（AC: Advisory Committee）、評議会（GC: Governing Council）、及び国際本部事務局の行う会議へ、国際本部事務局日本支部事務局長（連携会員）を含む会員等を派遣する。
- ・本年度、AC ならびに GC は一回程度、国際本部事務局会合は数回程度の開催が見込まれる。

(2) 第 2 区分

- ・フューチャー・アースの実施にあたり、国際本部事務局及びアジア地域事務局が行う会議へ国際本部事務局日本支部事務局長（連携会員）を含む会員等を派遣する。
- ・具体的には、日本学術会議が国際本部事務局として運営の一部を担う予定であるコア・プロジェクトに関する会議、タスクフォース、及び KAN (Knowledge-Action Networks) に関する会議等への派遣を行う。
- ・上記については本年度それぞれ数回程度見込まれる。

(3) 第 3 区分

- ・フューチャー・アースに関する活動を広報周知するため、国際学術団体等が行う会議へ国際本部事務局日本支部事務局長（連携会員）を派遣する。
- ・上記にあたっては、国連の行う会議等の分野横断的、あるいは地域的な広がりが必要なものを優先する。
- ・さらに、予算の状況に応じフューチャー・アースに関連するその他のコア・プロジェクトの会議へ会員等を派遣する。

本基本方針に基づいて国際会議等への代表者の派遣を行う場合は、別添の様式にて事前に幹事会の議決に付すものとする。

※様式記載省略

公開シンポジウム「LGBT/SOGI 施策のあり方―国・自治体は何をすべきか（仮）」
の開催について

1. 主 催：日本学術会議法学委員会社会と教育における LGBTI の権利保障分科会、
日本学術会議社会学委員会ジェンダー政策分科会
2. 共 催：ジェンダー法学会（予定）
3. 後 援：LGBT 法連合会（予定）
4. 日 時：平成30年12月19日（水）13：30～18：00
5. 場 所：日本学術会議講堂
6. 分科会等の開催：開催予定

7. 開催趣旨：

2020年の東京オリンピック・パラリンピック、そして2030年に向けたSDGs（持続可能な開発目標）の取り組みに向けて、LGBT/SOGIに関連する施策の実施は喫緊の課題となっている。国レベルでは人権や男女共同参画における取り組み、自殺対策や学校教育、雇用・労働の領域など、さまざまな取り組みが進められてきた。各自治体においても、LGBT支援宣言やパートナーシップ認定制度、職員研修、相談窓口の設置など、住民の生活に根ざした取り組みが活発化している。しかしながら、LGBT法連合会が公表した当事者の困難リストに示される課題は多岐にわたり、今後も継続的かつ大胆な国・自治体における取り組みが期待されている。

このシンポジウムでは、国と自治体のLGBT/SOGI施策の現状を理解するとともに、行政実務、市民社会、学術領域の3つの視点から今後の課題と展望を検討する。

8. 次 第：

13：30 開会挨拶

三成 美保（日本学術会議副会長・第一部会員、奈良女子大学副学長・教授
（研究院生活環境科学系））

13：45 企画趣旨説明

谷口 洋幸（日本学術会議連携会員、金沢大学国際基幹教育院准教授）

第一部 国におけるLGBT/SOGI施策の現状と課題

14：00 「LGBT当事者を取り巻く社会状況―よりそいホットライン事業の結果から
（仮）」

未定（厚生労働省社会擁護局（仮））※予定

14 : 20 「LGBT/SOGI 関連法の整備に向けた市民活動」

神谷 悠介 (LGBT 法連合会事務局長)

14 : 40 「LGBT/SOGI に関する法整備のあり方」

二宮 周平 (日本学術会議連携会員、立命館大学法学部教授)

15 : 00—15 : 20 (休憩)

第二部 自治体における LGBT/SOGI 施策の現状と課題

15 : 20 「東京都 SOGI 差別禁止条例の成立経緯と現状 (仮)」

未定 (東京都総務局人権部) ※予定

15 : 40 「自治体に LGBT/SOGI 施策を要望していくために

村木 真紀 (認定 NPO 法人 虹色ダイバーシティ 代表)

16 : 00 「自治体が LGBT/SOGI 施策に取り組む意義」

鈴木 秀洋 (日本大学危機管理学部准教授、元文京区男女協働課長)

16 : 20—16 : 40 (休憩)

第三部 総合討論

16 : 40—17 : 50 総合討論

(司会) 谷口 洋幸 (日本学術会議連携会員、金沢大学国際基幹教育院准教授)

(パネリスト) 第一部及び第二部の登壇者

17 : 50 閉会挨拶

伊藤 公雄 (日本学術会議第一部会員、京都産業大学現代社会学部客員教授)

9. 関係部の承認の有無：第一部承認

(下線の講演者は、主催分科会委員)

提案 14

公開シンポジウム「植物保護科学の SDGs への貢献」の開催について

1. 主 催：日本学術会議農学委員会植物保護科学分科会
2. 共 催：日本植物病理学会，日本応用動物昆虫学会，日本農薬学会，日本雑草学会，物化学調節学会
3. 日 時：平成30年12月1日（土） 13：00～17：30
4. 場 所：東京大学農学部1号館8番教室
5. 分科会の開催：開催予定 あり
6. 開催趣旨：国連が提唱する「持続可能な開発目標への取り組み」は日本学術会議でも重要な課題として取り上げている。植物保護科学分科会は、研究活動の深化を図るため、植物保護を学術活動の基盤とする研究者集団である日本応用動物昆虫学会、日本植物病理学会、日本農薬学会、日本雑草学会、植物化学調節学会により構成される植物保護科学連合と連携し、これまで、さまざまな喫緊の課題を取り上げてシンポジウムを開催してきた。本シンポジウムでは植物保護科学の分野からの SDGs への貢献について議論を深める。
7. 次 第：
13：00～13：10
開会挨拶「シンポジウム開催にあたって」
松本 宏（日本学術会議第二部会員、筑波大学生命環境系教授）

13：10～13：45
「日本学術会議の SDGs への取り組み（仮題）」
渡辺美代子（日本学術会議副会長）

13：45～14：20
「我が国における侵略的外来生物の影響と対策」
五箇 公一（国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター生態リスク評価・対策研究室長）

14：20～14：55

「食料生産における農薬のイノベーションとSDGsへの貢献」

廣岡 卓 （農薬工業会事務局長）

15：10～15：45

「砂漠化地域における植生修復と持続可能な土地管理」

大黒 俊哉 （東京大学大学院農学生命科学研究科教授）

15：45～16：20

「環境保全型農業における植物二次代謝産物の実用例と可能性」

岡田 憲典 （東京大学生物生産工学研究センター准教授）

16：20～16：55

「トマトの難防除病害の持続的管理技術について」

中保 一浩 （国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構野菜花き研究部門野菜病害虫・機能解析研究領域病害ユニット長）

16：55～17：30 総合討論

西澤 洋子 （日本学術会議連携会員、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構生物機能利用研究部門主席研究員）

9. 関係部の承認の有無：第二部承認

（下線の講演者等は、主催分科会委員）

公開シンポジウム「先端的フェノタイピング技術の農作物生産への実装」の開催について

1. 主 催：日本学術会議農学委員会農業生産環境工学分科会、日本学術会議農学委員会・食料科学委員会合同農業情報システム学分会、日本学術会議農学委員会・食料科学委員会合同 CIGR 分科会、豊橋技術科学大学

2. 共 催：なし

3. 後 援：日本農学アカデミー、日本生物環境工学会、日本農業工学会、農業情報学会、農業食料工学会、農業施設学会、日本農業気象学会、生態工学会、園芸学会、農林水産省 人工知能未来農業創造プロジェクト“ai tomato”（予定）

4. 日 時：平成30年12月18日（火）13：00～16：00

5. 場 所：豊橋技術科学大学キャンパス A-101 教室
（愛知県豊橋市天伯町雲雀ヶ丘1-1）

6. 分科会の開催：開催予定（農業生産環境工学分科会）

7. 開催趣旨：

センサ・IoT・AI・ロボット等の先端技術の社会実装が進むなか、農業生産においてもこれらの技術が急速に普及しつつある。特に、これまで人間の目視による観察と経験に依拠して行われてきた“植物の生育状態の評価”は、これらの技術を用いた先端的フェノタイピング技術として育種等に活用されるだけでなく、植物生育診断技術として農作物生産現場での利用も始まっている。そこでは、「草丈」や「茎の太さ」といった従来の静的な生体情報だけでなく、「茎伸長」や「光合成速度」、「吸水速度」などの動的な生体情報も用いられつつあり、農業生産という観点での新たなフェノタイピング（アグリフェノタイピング）の定義が求められている。本シンポジウムでは、先端エレクトロニクスによる革新的センサ技術の植物生体情報計測への応用の可能性について検討しつつ、植物工場などの高度な農作物生産システムに実装可能なフェノタイピング技術を展望する。

8. 次 第：

第一部司会：荊木 康臣（日本学術会議連携会員、山口大学大学院創成科学研究科教授）

13：00 開会の挨拶

大西 隆（豊橋技術科学大学学長、日本学術会議連携会員）

13：05 シンポジウムの開催趣旨

仁科 弘重（日本学術会議第二部会員、農業生産環境工学分科会委員長、愛媛大学理事・副学長、植物工場研究センター長、大学院農学研究科教授）

第一部：フェノタイピングの新展開

13：10 「フェノタイプの定義」（仮題）

青野 光子（日本学術会議連携会員、国立研究開発法人国立環境研究所室長）

13：25 「農作物生産へのフェノタイピングの応用の可能性」（仮題）

大政 謙次（日本学術会議連携会員、農業生産環境工学分科会副委員長、東京大学名誉教授）

13：50 「農業生産に利用可能な先端エレクトロニクス ―イオンイメージングセンサの可能性―」（仮題）

澤田 和明（豊橋技術科学大学 電気・電子情報工学系教授、エレクトロニクス先端融合研究所所長）

14：20－14：35（休憩）

第二部司会：北宅 善昭（日本学術会議連携会員、大阪府立大学大学院生命環境科学研究科教授）

第二部：フェノタイピングの実装に向けた展望

14：35 「人工光工光植物工場に求められるフェノタイピング」（仮題）

古在 豊樹（日本学術会議連携会員、千葉大学名誉教授）

15：00 「太陽光植物工場に実装すべき高精度生体情報計測」

高山 弘太郎（日本学術会議連携会員、愛媛大学大学院農学研究科教授、豊橋技術科学大学先端農業・バイオリサーチセンター特任教授）

15：25 「オープンフィールドにおける生体情報計測 ―SIP の開発成果―」（仮題）

打診中（未定）

15：50 閉会の挨拶

打診中（打診中）（未定）

16：00 閉会

9. 関係部の承認の有無：第二部承認

（下線の講演・登壇者は、主催分科会委員）

公開シンポジウム「アフリカ豚コレラ：家畜に壊滅的被害をもたらす、食料生産への脅威となる感染症～」の開催について

1. 主 催：日本学術会議食料科学委員会獣医学分科会、日本学術会議農学委員会・食料科学委員会合同食の安全分科会、日本学術会議食料科学委員会畜産学分科会
2. 後 援：日本獣医疫学会、東京大学大学院農学生命科学研究科アグリコクーン、農学アカデミー、中央畜産会、日本獣医学会、日本獣医師会、日本豚病研究会（全て予定）
3. 日 時：平成 30 年 12 月 28 日（金）13：30～16：30
4. 場 所：日本学術会議講堂
5. 分科会等の開催：開催予定

6. 開催趣旨：

感染症の中には、人への健康被害はなくても、家畜に壊滅的な被害をもたらすことで、食料生産への脅威となる、口蹄疫や今回の主題であるアフリカ豚コレラなどが挙げられる。

2010 年に宮崎県で発生した口蹄疫では約 30 万頭の牛と豚等の家畜が処分され、畜産関係の被害総額は約 1400 億円にも及んだ。さらに、心ない風評により全く関連性のない産業や市民生活にまで被害は拡散し、社会問題化したことは記憶に新しいところである。

豚やイノシシの感染症であるアフリカ豚コレラはもともとアフリカ特有の疾病であったが、2007 年のロシアでの初発からヨーロッパ 10 カ国に拡大し、2018 年 8 月には世界最大の養豚国である中国・東北部でアジアの初発例が報告され、中国・国内で発生地域が拡大し、我が国への脅威となっている。本病には有効なワクチンや治療法もなく、わが国に侵入・発生した場合の畜産業界への影響は口蹄疫をも越える甚大なものと予想される。

グローバル化社会の中で、本病が今後どう広がるのか、行政としてどう対処していけば良いのか等、同ウイルス感染症についての現状を概説するとともに、日本の水際防疫の課題や被害最小化について議論する。これにより、獣医学・食の安全・畜産学（畜産物生産衛生管理）の観点から、アフリカ豚コレラのような食料の安定供給にも大きな影響を及ぼす越境性家畜感染症の危機管理の重要性について一般市民（消費者）の理解醸成を図る。

7. 次 第：

司会：石塚真由美（日本学術会議第二部会員・食の安全分科会委員長、北海道大学獣医学部教授）

座長：杉山 誠（日本学術会議連携会員、岐阜大学応用生物科学部長・応用生物科学部教授）

13時30分～13時40分

開会の挨拶：高井 伸二（日本学術会議第二部会員・獣医学分科会委員長、北里大学副学
長・獣医学部長）

13時40分～14時10分

アフリカ豚コレラの概要と疫学：

杉浦 勝明（日本学術会議連携会員、東京大学大学院農学生命科学研究科）

14時10分～14時40分

アフリカ豚コレラの病原体と診断の研究

山田 学（農研機構動物衛生部門海外病）

休憩 14時40分～15時00分

15時00分～15時30分

国際行政 世界の発生状況と国際機関の役割

釘田 博文（OIE 国際獣疫事務局アジア太平洋事務所）

15時30分～16時00分

国内行政 我が国の対策

山野 淳一（農林水産省動物衛生課家畜防疫対策室長）

16時00分～16時10分

「知の統合」による家畜感染症の被害最小化を目指して

芳賀 猛（日本学術会議連携会員、東京大学農学生命研究科准教授）

16時10分～16時30分

総合討論：石塚 真由美（日本学術会議第二部会員・食の安全分科会委員長、北海道大学獣
医学部教授）

杉山 誠（日本学術会議連携会員・獣医学分科会副委員長、岐阜大学応用生物科
学部長）

柏崎 直巳（日本学術会議連携会員・畜産学分科会副委員長、麻布獣医学園理事
長）

講演者：杉浦・山田・釘田・山野・芳賀

（まとめ：座長 家畜感染症の重要性や今後の研究や防疫対応の展望など）

閉会の挨拶：眞鍋 昇（日本学術会議第二部会員・畜産学分科会委員長、大阪国際大学学
長補佐）

8. 関係部の承認の有無：第二部承認

（下線の講演者等は、主催分科会委員）

公開シンポジウム「ハイパワーレーザーによる高エネルギー密度科学技術の展望」
の開催について

1. 主 催：日本学術会議総合工学委員会エネルギーと科学技術に関する分科会
2. 共 催（予定）：国立大学法人大阪大学レーザー科学研究所、国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構関西光科学研究所、国立研究開発法人理化学研究所・播磨研究所 放射光科学総合研究センター、ローレンスリバモア国立研究所、ロチェスター大学レーザーエネルギー学研究所、スタンフォード大学 SLAC Linac Coherent Light Source
3. 後 援：IFE フォーラム、駐米日本大使館
4. 協 賛：一般社団法人レーザー学会、一般社団法人日本物理学会、一般社団法人プラズマ核融合学会
5. 日 時：平成 31 年 1 月 23 日（水）～ 24 日（木）
6. 場 所：Japan Embassy, Washington D.C. USA
7. 分科会等の開催：予定無し

8. 開催趣旨：

ハイパワーレーザーは、原子力や核融合への応用等エネルギー科学技術に深く関わっている。パワーレーザーが拓く極限状態（高エネルギー密度状態）の科学は、その基盤であり、レーザー加工・プロセス、新物質創成、核融合等の科学技術・産業イノベーションの源泉にもなっている。

我が国内外で大小さまざまなハイパワーレーザー研究施設が稼働を開始し、国際的に高エネルギー密度科学研究は急速に展開している。本分野における研究開発の進展と日米連携につき意見交換するため、平成27年9月の米国ローレンスリバモア研究所におけるシンポジウムに続き、国際シンポジウムを駐米日本大使館で開催する事を提案する。このシンポジウムは前回のシンポジウムで提起された連携協力の課題と共に、新たな取り組みとして検討が進んでいる「高エネルギー密度科学分野の日米協力に向けた事業」の推進方策を議論する。なお、本シンポジウムは日本学術会議の学術会議行動規範[1]を遵守し「科学・技術のデュアルユース問題に関する検討委員会」報告の指針に準拠[2]して行う。

[1] <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-s168-1.pdf>

[2] <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-h166-1.pdf>

9. 次 第

【1.23 国際シンポジウム】

午前司会 三間罔興（日本学術会議連携会員、大阪大学名誉教授、学校法人光産業創成大学院大学特任教授）

9:00 開会の辞

鈴置保雄（日本学術会議第三部会員、愛知工業大学工学部教授）

9:10 挨拶 ジンポジウムへの期待

渡辺美代子（日本学術会議第三部会員、副会長、国立研究開発法人科学技術振興機構副理事）

駐米日本大使（調整中）

大石富彦（IFE フォーラム座長、関西電力株式会社取締役常務執行役員）

9:30 日本の科学技術政策

文部科学省学術政策局（調整中）

9:45 米国の科学技術政策

米国エネルギー省（調整中）

10:00 我が国における高エネルギー密度科学研究の展望と課題

兒玉了祐（大阪大学レーザーエネルギー学研究所所長）

10:30 米国における高エネルギー密度科学研究の展望と課題

Patricia Falcone（ローレンスリバモア研究所副所長）

11:00 パワーレーザーの開発と量子ビーム科学技術

河内哲哉（国立研究開発法人量子科学技術研究会開発機構関西光科学研究所所長）

11:30-13:00 休憩

午後司会 犬竹正明（日本学術会議連携会員、東北大学名誉教授、一般財団法人高度情報科学技術研究機構研究嘱託、）

13:00 ロチェスター大学レーザーエネルギー学研究所の現状と将来構想

Mike Campbell（ロチェスター大学レーザーエネルギー学研究所所長：Director of Laboratory for Laser Energetics(LLE)）

13:30 理化学研究所が拓く光科学技術

石川哲哉（国立研究開発法人理化学研究所放射光科学総合研究センターセンター長）

14:00 LCLS が拓く高エネルギー密度科学

Mike Dunne（スタンフォード大学教授、Director of the Linac Coherent Light Source (LCLS)）

14:30-15:00（休憩）

15:00 総合討論-エネルギー科学技術とパワーレーザー

司会 疇地宏（日本学術会議連携会員、大阪大学レーザー科学研究所・特任教授）

コーディネーター：近藤駿介（日本学術会議連携会員、原子力発電環境整備機構理事長）

パネラー：兒玉了祐、渡辺美代子、石川哲哉、河内哲哉、Patricia Falcone、Mike Campbell、Mike Dunne 他

17：00 おわりに

笹尾真美子（日本学術会議連携会員、東北大学名誉教授、同志社大学研究開発推進機構嘱託研究員）

17：30 閉会

18：00 意見交換会

【1.24 サテライト会議】

国際ワークショップ（分科会）

カテゴリー（日本側コーディネーター、米国側コーディネーター）

1）レーザー核融合：Laser Fusion

藤岡慎介（大阪大学レーザー科学研究所教授）、米国側コーディネーター（調整中）

2）レーザー宇宙物理学：Laser laboratory astrophysics

坂和洋一（大阪大学レーザー科学研究所准教授）、米国側コーディネーター（調整中）

3）レーザー超高压と加工：Laser driven high power pressure & material processing

尾崎典雅（大阪大学工学研究科准教授）、米国側コーディネーター（調整中）

4）レーザー加速と応用：Laser acceleration & applications

余語覚文（大阪大学レーザー科学研究所准教授）、米国側コーディネーター（調整中）

5）極限強度レーザー科学：High field science

日本側コーディネーター、米国側コーディネーター（調整中）

6）高輝度X線レーザー：X-ray Free Electron Laser（XFEL）

日本側コーディネーター、米国側コーディネーター（調整中）

9:00-16:00 パラレルセッション（12件の口頭発表：1人20分+5分質問）途中20分

Coffee break

各カテゴリーから6名（日本側3名米国側3名の発表）

パラレルセッション1（午前：レーザー核融合、午後：レーザー超高压・加工）

パラレルセッション2（午前：レーザー加速、午後：極限高強度レーザー）

パラレルセッション3（午前：レーザー宇宙、午後：X-ray Free Electron Laser（XFEL）

16:00ー17:00 サマリーと総合討論

コーディネーター 日本側：千徳靖彦（大阪大学レーザー科学研究所教授）、米国側：（調整中）

10. 関係部の承認の有無：第三部承認

（下線の講演者等は、主催分科会委員）

公開シンポジウム「ロボットのシステムインテグレーション科学を目指して」
の開催について

1. 主 催：日本学術会議機械工学委員会ロボット学分科会

2. 共 催：一般社団法人計測自動制御学会

3. 後 援：一般社団法人日本ロボット学会 （予定）
一般社団法人日本ロボット工業会 （予定）
ロボット革命イニシアティブ協議会（予定）

4. 日 時：平成 30 年 12 月 13 日（木） 13：30～17：00

5. 場 所：大阪工業大学梅田キャンパス セミナ 204 室
（第 19 回 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会会場にて同時開催）

6. 分科会等の開催：開催予定

7. 開催趣旨：

ロボットは多くの要素の集合体としての巨大なシステムと想定できる。今後、IoT 時代を迎えて、より多くの情報をロボットに取り込む必要が高まっている。このような状況において、センサ、アクチュエータ、コンピュータなどの要素をどのように選定し、どのようにシステムとして構築するかの技術と科学が重要となる。このためには、従来から議論されてきた設計科学、System of Systems、モデルベース/データベース、要素還元的手法、AI などさまざまな視点があるものの、ロボットのインテグレーションとしての考察が十分ではない。そこで、本シンポジウムでは現状の整理と今後の可能性を検討したい。

8. 次 第：

司 会 金子 真（日本学術会議第三部会員、大阪大学大学院工学研究科教授）
13：30～13：50

川村貞夫（日本学術会議連携会員、立命館大学理工学部教授）

「本シンポジウムの趣旨とロボティクスのシステムインテグレーション科学の可能性」

13：50～14：10

原 辰次（日本学術会議連携会員、中央大学研究開発機構機構教授）
（講演タイトル調整中）

14 : 10～14 : 30

金子 真（日本学術会議第三部会員、大阪大学大学院工学研究科教授）

「システムインテグレーション設計における盲点」

14 : 30～14 : 50

國吉康夫（日本学術会議連携会員、東京大学次世代知能科学研究センター長・教授）

「現代 AI の問題点とその解決：実世界に開かれた人間中心システムへ」

14 : 50～15 : 10

松原崇充（奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科准教授）

「End-to-end 強化学習とシステムインテグレーション」

15 : 10～15 : 20 休憩

15 : 20～15 : 40

大西公平（日本学術会議第三部会員、慶應義塾大学 G R I 特任教授）

「力制御のシステムインテグレーション」

15 : 40～16 : 00

本田幸夫（大阪工業大学ロボティクス&デザイン工学部/ロボティクス&デザインセンター教授）

「福祉ロボットのデザインとシステムインテグレーション」

16 : 00～16 : 20

青山和浩（東京大学大学院工学系研究科システム創生学専攻教授）

（講演タイトル調整中）

16 : 20 総合討論

（司会）川村貞夫（日本学術会議連携会員、立命館大学理工学部教授）

17 : 00 閉会

8. 関係部の承認の有無：第三部承認

（下線の登壇者は、主催分科会委員）

公開シンポジウム「第 89 回日本学術会議-日本衛生学会共催シンポジウム」の
開催について

1. 主 催：日本学術会議健康・生活科学委員会・環境学委員会合同環境リスク
分科会
2. 共 催：日本衛生学会、日本生命科学アカデミー、全国公衆衛生関連学協会
3. 後 援：なし
4. 日 時：平成 31 年 2 月 3 日（日） 13：20－15：20
5. 場 所：名古屋大学東山キャンパス
6. 分科会等の開催：開催予定
7. 開催趣旨：
公害病認定から半世紀経過した今、わたくしたちが考えること―持続可能な
開発目標の達成に向けて

我々は多くの公害病（水俣病、イタイイタイ病、四日市ぜんそく、ヒ素中毒など）に悩まされてきた。厚生省が公害病と認定して半世紀経過した今日、現状はどうであろうか。新たな水質汚染の問題は発生していないであろうか。経験を踏まえた新たな取り組みはどうであろうか。何を未来に残せるであろうか。国連の持続可能な開発目標(Sustainable development goals: SDGs)6は「すべての人々に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する」を2030年までに達成することとし、目標6のターゲット2(6.3)では具体的に、汚染の減少、投棄の廃絶と有害な化学物・物質の放出の最小化、未処理の排水の割合半減及び再生利用と安全な再利用の世界的規模で大幅に増加させることにより、水質を改善すること、を目指している。目標3「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する」のターゲット3.9 では2030年までに、有害化学物質、ならびに大気、水質及び土壌の汚染による死亡及び疾病の件数を大幅に減少させることを、目標12「持続可能な生産消費形態を確保する」のターゲット12.4では 2020年までに、合意された国際的な枠組みに従い、製品ライフサイクルを通じ、環境上適正な化学物質やすべての廃棄物の管理を実現し、人の健康や環境への悪影響を最小化するため、化学物質や廃棄物の大気、水、

土壌への放出を大幅に削減することを、目標11では「包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する」ことを目標としている。

本シンポジウムでは、「水の汚染」が原因となった公害病を中心に議論し、持続可能な開発目標の達成に向けて行動目標を示す。村田先生には窒素水俣工場のアセトアルデヒド製造工程で使用された無機水銀から副生したメチル水銀による公害に加えて、近年の中国の水銀鉱山周辺の稲のメチル水銀汚染問題を、青島先生には今なお続くイタイイタイ病について原因となったカドミウムによる水系環境汚染の歴史・対策・現状を、黒田先生には旧土呂久鉱山で行われた亜ヒ酸製造に伴うヒ素中毒の歴史と現状を、大塚先生には水俣病諸判決における過失の判断や、国の規制権限不行使の責任、水俣病事件と福島原発事故の異同に触れながら水俣条約の国内実施についてSDGsを、最後に中村先生には公害を経験した地域が長い年月をかけて、健康を重視した社会の再構築を進めている水俣市の環境モデル都市の取り組みを紹介する。半世紀という長い年月をかけて公害に対して学術的に対峙してきた成果を市民と共有し、持続可能な社会の実現を目指す議論を深めたい。

8. 次 第：

開会の挨拶：

秋葉澄伯（日本学術会議第二部会員、鹿児島大学名誉教授）

座長：

那須民江（日本学術会議連携会員、中部大学生命健康科学部特任教授、名古屋大学名誉教授）

野原恵子（日本学術会議連携会員、国立研究開発法人国立環境研究所環境リスク・健康研究センターフェロー）

講演者：

1. 「水俣病」
村田勝敬（日本学術会議連携会員、秋田大学大学院医学系研究科教授）
2. 「イタイイタイ病」
青島恵子（日本学術会議連携会員、医療法人社団継和会萩野病院院長）
3. 「土呂久ヒ素中毒」
黒田嘉紀（宮崎大学医学部社会医学講座公衆衛生学分野 教授）
4. 「公害裁判から未来の行動目標へ」
大塚 直（日本学術会議連携会員、早稲田大学法学部教授）
5. 「環境モデル都市の取り組み」

中村桂子（日本学術会議連携会員、東京医科歯科大学大学院国際保健医療事業開発学教授）

閉会の挨拶：

渡辺知保（日本学術会議連携会員、国立研究開発法人国立環境研究所理事長、東京大学大学院医学系研究科名誉教授）

9. 関係部の承認の有無：第三部承認
（下線の講演者等は、主催分科会委員）

公開シンポジウム「第 92 回日本学術会議-日本産業衛生学会共催シンポジウム」の開催について

1. 主 催：日本学術会議健康・生活科学委員会・環境学委員会合同環境リスク分科会
2. 共 催：日本産業衛生学会、日本生命科学アカデミー
3. 後 援：なし
4. 日 時：平成 31 年 5 月 25 日（土）13：00 ～ 15：00
5. 場 所：名古屋国際会議場
6. 分科会等の開催：開催予定
7. 開催趣旨：
有害物質の環境循環と健康－持続可能な開発目標 12「つくる責任、つかう責任」をめぐる

過去に使用された有害物質の廃棄方法や環境に循環している物質の動態はどうなっているのでしょうか？持続可能な開発目標（SDGs）12「持続可能な生産と消費を考える」の 4 では「2020 年までに合意された国際的枠組みに従い、製品やライフサイクルを通じ、環境上適正な化学物質やすべての廃棄物の管理を実現し、人の健康や環境への悪影響を最小化するため、化学物質の大気、水、土壌への放出を大幅に制限する」としている。日本産業衛生学会は本来ものづくりに携わる労働者の健康を考える学会である。労働衛生は勿論の責務であるが、作り出された物に対する責任もある。PCB や水銀などはどのように廃棄処理されているのでしょうか？建築物等に使用されているアスベストは 2012 年に全面使用禁止となったが、現在除去工事に伴う飛散による幼稚園児や駅利用者への曝露事故が報告されている。このような場合は健康リスク評価が必要であるが、果たして適切に行われているのでしょうか。環境中に投棄されたプラスチックゴミは紫外線によって小片化（マイクロプラスチック）し、疎水性の化学物質（例えばペルフルオロ化合物類）を吸着する。この生態系への影響あるいはそれを介したヒトへの影響はまだ解明されていない。SDGs14.2 では「2020 年までに、海洋及び沿岸の生態系に関する重大な悪影響を回避するため、強靱性（レジリエンス）の強化などによる持続的な管理と保護を行い、健全で生産的な海洋を実現するため、海洋及び沿岸の生態系の回復のための取組を行う」という目標を掲げている。東京電力福島第一原子力発電所の事故では広範囲に放射性物質が拡散した。

日常生活で原子力発電の恩恵を受けている我々であるが、一旦事故が起きた場合の放射性物質の環境循環と日常生活への影響や汚染除去の困難さなどについて国民と考えてみる必要がある。

この公開シンポジウムでは、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けて、益永先生には我が国の有害化学物質の管理状況とその問題点を、久永先生にはこれまでのアスベスト関連がんの患者と曝露の増加が続いている現在、何を学び、今後に生かすかを、高田先生には現在もっとも注目されている海洋マイクロプラスチック汚染と付随する化学物質を予防原則的視野から、最後に近藤先生からは東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故後の某避難地区をとりあげ、避難中・避難後の汚染状況と、課題解決を目指した超学際的な取り組みについてご講演いただき、特に「目標 12 持続可能な生産消費形態を確保する」ために日本学術会議が果たすべき役割を市民と議論したい。

8. 次 第：

開会の挨拶：

秋葉澄伯（日本学術会議第二部会員、鹿児島大学名誉教授）

座長：

那須民江（日本学術会議連携会員、中部大学生命健康科学部特任教授）

續 輝久（日本学術会議連携会員、九州大学名誉教授）

講演者：

1. 「わが国の製品中有害化学物質の管理とその問題点」
益永茂樹（日本学術会議連携会員、横浜国立大学名誉教授）
2. 「アスベスト飛散事故による市民の被曝と健康リスク管理」
久永直見（愛知学泉大学 非常勤講師）
3. 「海洋マイクロプラスチック汚染とその対策」
高田秀重（東京農工大学農学部環境資源科学科 教授）
4. 「環境における放射性物質の循環と暮らしの再生」
近藤昭彦（日本学術会議連携会員、千葉大学環境リモートセンシング研究センター教授）

閉会の挨拶：

浅見真理（日本学術会議第三部会員、国立保健医療科学院生活環境研究部
上席主任研究官）

9. 関係部の承認の有無：第三部承認

（下線の講演者等は、主催分科会委員）

公開シンポジウム「第 8 回計算力学シンポジウム」の開催について

1. 主 催：日本学術会議総合工学委員会・機械工学委員会合同
計算科学シミュレーションと工学設計分科会
2. 共 催：一般社団法人可視化情報学会、特定非営利活動法人 CAE 懇話会、
一般社団法人日本応用数理学会、一般社団法人日本機械学会、
一般社団法人日本計算工学会、日本計算数理工学会、
日本計算力学連合、一般社団法人日本シミュレーション学会、
アジア太平洋計算力学連合 (Asian Pacific Association for
Computational Mechanics, APACM)、国際計算力学連合
(International Association for Computational Mechanics,
IACM)
3. 協 賛：公益社団法人日本自動車技術会自動車技術会
4. 日 時：平成 30 年 12 月 12 日（水）10:00～17:30
5. 場 所：日本学術会議講堂
(利用する会議室数 1、使用目的：計算科学シミュレーションと工
学設計分科会と計算力学小委員会の合同開催)
6. 分科会等の開催：計算科学シミュレーションと工学設計分科会と計算力学
小委員会の合同開催
7. 開催趣旨：第 I 部では、我が国を代表する計算力学関連学会が一堂に会
し、各学会を代表する若手が最新の成果を披露する。日本における
広い分野の計算力学研究と活用の成果をまとめて聞くことができる
貴重な機会となる。第 II 部では、「Society5.0 を支える人と人工
物システム・サービスの計算情報科学基盤創成」と題して、パネル
討論を行う。
8. 次 第：
総司会：越塚誠一（日本学術会議連携会員・計算科学シミュレーションと
工学設計分科会委員長、東京大学大学院工学系研究科システム創成学
専攻教授）
- 10:00 開会の辞
吉村忍（日本学術会議会員・総合工学委員会委員長、東京大学副学
長・大学院工学系研究科システム創成学専攻教授）

第 I 部 若手研究者による講演

10 : 10-10 : 40 講演 1 (CAE 懇話会)

高木洋平 (横浜国立大学大学院工学研究院システムの創生部門 准教授)

「計算流体力学 (CFD) における AI・深層学習の応用: ニューラルネットワークによる代理モデル」

10 : 40-11 : 10 講演 2 (日本機械学会計算力学部門)

田中展 (大阪大学大学院工学研究科機械工学専攻 講師)

「計算力学に基づくセル状固体の非線形力学特性の解明とその応用」

11 : 10-11 : 40 講演 3 (日本計算工学会)

西浦泰介 (海洋研究開発機構 数理科学・先端技術研究分野 主任技術研究員)

「世界最大の個別要素法を用いた砂箱シミュレーション〜断層地盤内部の応力状態と円弧状地形の関係〜」

11 : 40-12 : 10 講演 4 (日本計算力学連合)

Tinh Q. Bui (東京工業大学大学院情報理工学研究科情報環境学専攻 特任准教授)

「Stochastic High-Performance Computing for Modeling Spot-Welds Failure」

12 : 10-13 : 40 昼休み

13 : 40-14 : 10 講演 5 (日本シミュレーション学会)

山田知典 (東京大学大学院工学系研究科システム創成学専攻 准教授)

「大規模マルチフィジックスシミュレーションの進展」

14 : 10-14 : 40 講演 6 (可視化情報学会)

竹島由里子 (東京工科大学大学院 メディアサイエンス専攻 教授)

「微分位相幾何学と可視化」

14 : 40-15 : 10 講演 7 (日本応用数理学会)

井元佑介 (東北大学知の創出センター 特任助教)

「粒子法を用いた非圧縮性流れシミュレーションの安定性解析」

15 : 10-15 : 40 講演 8 (日本計算数理工学会)

飯盛浩司 (名古屋大学大学院工学研究科機械理工学専攻 助教)

「境界要素法を用いたトポロジー最適化について」

15 : 40-15 : 50 休憩

第 II 部 パネル討論 「Society5.0 を支える人と人工物システム・サービスの計算情報科学基盤創成」 (15 : 50-17 : 20)

司会 : 平野 徹 (日本学術会議 計算科学シミュレーションと工学設計分科会 計算力学小委員会 幹事、ダイキン情報システム株式会社 シニアスキルスペシャリスト、CAE 懇話会 理事長、大阪工業大学 客員教授)

パネラー

村川正宏（産業技術総合研究所人工知能研究センター 総括企画主幹）

依田高典（京都大学大学院経済学研究科 教授）

奥田洋司（東京大学大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻 教授）

17：20 閉会の辞

萩原一郎（日本学術会議連携会員、明治大学特任教授・先端数理科学
インスティテュート&自動運転社会総合研究所所員）

9. 関係部の承認の有無：第3部承認

（下線の登壇者は、主催分科会委員）

公開シンポジウム「健康寿命を延ばす新しいサイエンス

～身体と細胞のアプローチ」の開催について

2. 主 催：日本学術会議総合工学委員会・機械工学委員会合同
計算科学シミュレーションと工学設計分科会

2. 共 催：一般社団法人可視化情報学会、一般社団法人日本応用数理学会、
一般社団法人日本機械学会、一般社団法人日本計算工学会、一般社団法人日
本シミュレーション学会、国際身心一体学会 (International Society of
Human Core Dynamic Science)

3. 協賛：公益社団法人日本自動車技術会

4. 日 時：平成 31 年 1 月 25 日（金）10：00～17：00

5. 場 所：日本学術会議講堂
利用する会議室数 1、使用目的：心と脳など新しい領域検討小委員会の開催

6. 分科会等の開催：開催予定（or なし）
あり。心と脳など新しい領域検討小委員会の開催

7. 開催趣旨：心と脳など新しい領域検討小委員会では、「健康寿命を延ばす
新しいサイエンス～心と脳への身体と細胞のアプローチ」に関する新学術領域
の提唱を目指した提言を準備している。その内容について多くの方に披露し、
更に充実させることを目指す。

8. 次 第：

午前司会：大倉 典子（日本学術会議第三部会員、芝浦工業大学工学部教授）

10:00-10:15 開催の挨拶

越塚 誠一（日本学術会議連携会員、東京大学大学院工学研究科教
授）

10：15-10:30 『いのちある人間』を活かす社会設計

跡見 順子（日本学術会議特任連携会員、東京農工大学工学府客員
教授、東京大学名誉教授）

10：30-11:30 身体と細胞のメカニズムを取り入れた柔らかい社会メカニズム
福田 収一（慶応義塾大学 SDM 研究所顧問／首都大学東京名誉教
授）

午後司会：清水美穂（東京農工大学工学府客員准教授）

11:30-13:00 （ 昼休み休憩 ）

13:15-14:00 人間力を活かす健康産業創生に向けて

江崎 禎英（経済産業省）

14:00-14:45 細胞～身体をつなぐメカトロジー

跡見 順子（日本学術会議特任連携会員、東京農工大学工学府客員教授、東京大学名誉教授）

14:45-15:30 細胞～身体をつなぐメカトロジー

菊池 吉晃（首都大学東京大学院人間健康科学研究科フロンティアヘルスサイエンス学域 学域長/同学域脳機能解析科学分野 教授/言語の脳遺伝子研究センター 教授）

15:30-15:45 （ 休憩 ）

15:45-16:55 総合討論：心と脳のメカトロジー～マイルドなストレスとホメオスタシス

（司会）萩原一郎（日本学術会議連携会員、明治大学研究・知財戦略機構特任教授、東京工業大学名誉教授）

（コメンテーター）
久保 司郎（日本学術会議連携会員、摂南大学理工学部機械工学科・教授、大阪大学名誉教授）

内藤 健（早稲田大学大学院理工学術院・教授）

佐々木直哉（日本学術会議連携会員、株式会社日立製作所技師長／内閣府 SIP（戦略的イノベーション創造プログラム）プログラムディレクター）

則内まどか（首都大学東京大学院人間健康科学研究科フロンティアヘルスサイエンス学域脳機能解析科学分野 客員教授）

16:55-17:00 閉会の挨拶

跡見 順子（日本学術会議特任連携会員、東京農工大学工学府客員教授／東京大学名誉教授）

9. 関係部の承認の有無：第3部承認

（下線の登壇者は、主催分科会委員）

公開シンポジウム「海洋観測における研究船の役割：成果と展望」
の開催について

1. 主 催：日本学術会議地球惑星科学委員会 S C O R 分科会
2. 共 催：なし
3. 後 援：東京大学大気海洋研究所
4. 日 時：平成30年12月25日（火）13：00～17：00
5. 場 所：日本学術会議講堂
6. 分科会等の開催：開催予定

7. 開催趣旨：

周囲を海に囲まれた我が国では、経済・社会・安全保障・文化のあらゆる面で海が大きな役割を果たしている。この豊かな海を守り継承していくためには、海についての科学的知見を深め、海で活躍する人材を育てていかなければならない。また、「国連持続可能な開発のための海洋科学の10年（2021-2030）」やSDGs14「海の豊かさを守ろう」に示されているように、地球環境変動や生物多様性の保全、海洋資源の持続的開発などは地球規模の課題であり、海洋観測においては国際的な協力と連携が重要だとの認識が高まっている。現在の海洋観測では、衛星や航空機、深海探査機など多彩な技術が利用されるようになったが、船が最も重要かつ基本となることに変わりはない。しかしながら、我が国の観測船・研究船をとりまく情勢は近年非常に厳しく、機材の老朽化や観測日数の減少が著しくなっている。本シンポジウムでは、これまでに研究船が果たしてきた役割を概観した上で、これからの研究船はどのようにあるべきかを議論したい。

8. 次 第：

13：00 開会挨拶

山形 俊男（日本学術会議連携会員、国立研究開発法人海洋研
開発機構アプリケーションラボ特任上席研究員）

13：10 挨拶

阿蘇隆之（文部科学省研究開発局海洋地球課課長）

- 13 : 15 基調講演：海洋観測の重要性と船の果たす役割
津田 敦（東京大学大気海洋研究所所長）
- 13 : 45 公募型成果 1：未知（第 4）の南極底層流生成域の発見
大島 慶一郎（北海道大学低温科学研究所教授）
- 14 : 05 公募型成果 2：海底地殻変動観測で捉えた 2011 年東北地方太平洋沖
地震
日野 亮太（東北大学大学院理学研究科教授）
- 14 : 25 公募型成果 3：GEOTRACES：海の 3 D 元素診断～ 2 2 世紀の気候変動
予測に向けて
張 勁（日本学術会議連携会員、富山大学大学院理工学研究
部教授）
- 14 : 45 公募型成果 4：インド洋深海熱水域調査の成果と新しい学術領域への
波及
高井 研（国立研究開発法人海洋研究開発機構深海・地殻内生物
圏研究分野分野長）
- 15 : 05 大陸間縦横断高精度観測（GO-SHIP）の成果
河野 健（国立研究開発法人海洋研究開発機構地球環境観測研究
開発センター長）
- 15 : 25 気象庁定線時系列観測の成果
中野 俊也（気象庁地球環境海洋部海洋気象課海洋環境解析セン
ター所長）
- 15 : 45 練習船の研究利用と人材育成
神田 穰太（東京海洋大学副学長）
- 16 : 00 海洋観測の未来と研究船利用の展望
花輪 公雄（日本学術会議連携会員、東北大学名誉教授）
- 16 : 15—16 : 25 （休憩）

16 : 25 パネルディスカッション：研究船の未来

(座長) 植松 光夫 (日本学術会議連携会員、東京大学大気海洋研究所名誉教授)

(パネリスト) 津田 敦 (東京大学大気海洋研究所所長)

平 朝彦 (国立研究開発法人海洋研究開発機構
理事長)

花輪 公雄 (日本学術会議連携会員、東北大学理事)

日比谷紀之 (日本学術会議特任連携会員、東京大学
大学院理学研究科教授、日本海洋学会会長)

江淵 直人 (北海道大学低温科学研究所教授)

16:55 閉会挨拶

蒲生 俊敬 (日本学術会議連携会員、東京大学大気海洋研究所名誉教授)

17 : 00 閉会

9. 関係部の承認の有無：第3部承認

(下線の登壇者は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「第4回理論応用力学シンポジウム」の開催について

1. 主 催：総合工学委員会・機械工学委員会合同力学基盤工学分科会
2. 共 催：公益社団法人応用物理学会、公益社団法人化学工学会、公益社団法人地盤工学会、公益社団法人土木学会、公益社団法人日本応用数理学会、一般社団法人日本風工学会、一般社団法人日本機械学会、公益社団法人日本気象学会、一般社団法人日本計算法学会、一般社団法人日本建築学会、一般社団法人日本原子力学会、一般社団法人日本航空宇宙学会、公益社団法人日本材料学会、公益社団法人日本地震工学会、一般社団法人日本数学会、公益社団法人日本船舶海洋工学会、公益社団法人日本伝熱学会、一般社団法人日本物理学会、一般社団法人日本流体力学会、一般社団法人日本レオロジー学会、公益社団法人農業農村工学会、日本計算数理工学会、日本混相流学会（予定）
3. 協 賛：公益社団法人自動車技術会
4. 日 時：平成 31 年 1 月 23 日（水）13：00～17：00
5. 場 所：日本学術会議 講堂 外 1 室
6. 分科会の開催：開催予定
7. 開催趣旨：

古典力学というと、機械力学・材料力学・流体力学・熱力学のように、すでに完成された基盤学問のように捉えられがちであるが、自然界にはまだまだ理論モデルが構築されていない未解決の力学の問題が多数存在する。これら未解決の問題に対応するには、既存の基盤学問領域の枠にとらわれない広範囲な学問分野との融合が必要である。本シンポジウムは平成 30 年 3 月に開催した第 3 回シンポジウムの開催趣旨を受け継いで、古典力学研究の裾野を広げうる先端的研究に関する最新動向を俯瞰すると共に、古典力学を基盤とする研究者が異分野と協働して今後切り開くべき新しい次世代力学研究を展望する。また、学生や若手研究者の参加により、次世代の力学を鼓舞するものとする。
8. 次 第：

司会：高木 周（東京大学大学院工学系研究科教授）

- 13 : 00 開会の挨拶
高田 保之 (日本学術会議連携会員、九州大学大学院工学研究院教授)
- 13 : 10 基調講演「微視的構造の不安定性に起因するマルチスケール力学特性」
中谷 彰宏 (大阪大学大学院工学研究科教授)
- 13 : 50 招待講演 (1) 「地震の力学：トライボロジー・構造地質学・統計物理の融合」
波多野 恭弘 (東京大学地震研究所准教授)
- 14 : 20 招待講演 (2) 「機械学習の流体力学への応用」
深潟 康二 (慶応義塾大学理工学部教授)
- 14 : 50－15 : 10 (休憩)
- 15 : 10 招待講演 (3) 「DNA マイクロ構造における相転移と分子ロボティクスへの展開」
瀧ノ上 正浩 (東京工業大学情報理工学院准教授)
- 15 : 40 招待講演 (4) 「人工知能技術を用いた新しい分子・物質の発見」
津田 宏治 (東京大学新領域創成科学研究科教授)
- 16 : 10 パネルディスカッション
- 16 : 50 閉会の挨拶
岸本 喜久雄 (日本学術会議連携会員、東京工業大学名誉教授)
- 17 : 00 閉会

9. 関係部の承認の有無：第三部承認

(下線の講演者等は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「野生動物と共に生きる未来—持続可能な野生動物管理システムの構築をめざして」の開催について

1. 主 催：日本学術会議課題別委員会「人口縮小社会における野生動物管理のあり方の検討に関する委員会」
2. 共 催：兵庫県、兵庫県立大学（全て予定）
3. 後 援：環境省、農林水産省、文部科学省（全て予定）
4. 日 時：平成31年2月9日（土）：13：00～16：30（12：00受付開始）
5. 場 所：兵庫県公館 大会議室（〒650-8567 神戸市中央区下山手通4丁目4番1号）
6. 委員会等の開催：開催予定
7. 開催趣旨：日本では世界に先駆けて人口減少・高齢化が進んでいる。大都市圏への人口集中も相まって地方の人口縮小が急速に進む一方、ニホンジカやイノシシなど野生動物の個体群増加と分布拡大によって人間活動との軋轢が生じている。農林水産業、生態系、生活環境などへの被害を防ぎながら、野生動物を地域資源として持続可能な方法で利用しつつ共存していくことは、社会的な重要課題の1つとなっている。そのためには、科学的な野生動物管理システムの構築が欠かせない。日本学術会議では、環境省自然環境局の審議要請を受けて、課題別委員会「人口縮小社会における野生動物管理のあり方の検討に関する委員会」を設置し、野生動物管理をめぐる問題を多様な学術の視点から分析し、野生動物の科学的な管理システムのあり方について具体的な検討を行ってきた。シンポジウムでは、これまでの審議で明らかになった課題およびそれにもとづく提案の骨子を紹介すると共に、この問題に関心を寄せる多様な主体の間での活発な意見交換を通じて情報共有をめざす。
8. 次 第：
 - 13：00 開会の挨拶：
 - （主催者挨拶）
 - 山極 壽一（日本学術会議会長、京都大学総長）
 - 井戸 敏三（兵庫県知事）
 - （来賓挨拶）
 - 鳥居 敏夫（環境省大臣官房審議官）
 - 13：15 趣旨説明：
 - 「人口縮小社会における野生動物管理のあり方の検討に関する委員会」の審議と

提案の骨子

鷺谷 いづみ（日本学術会議連携会員・人口縮小社会における野生動物管理のあり方の検討に関する委員会委員長、中央大学理工学部人間総合理工学学科教授）

13:35-14:50 講演：

13:35 野生動物管理学からみた現状と課題：日本型管理システムの構築に向けて
梶 光一（日本学術会議特任連携会員・人口縮小社会における野生動物管理のあり方の検討に関する委員会副委員長、東京農工大学大学院教授）

14:00 兵庫県における野生動物管理システム：

横山 真弓（日本学術会議特任連携会員・人口縮小社会における野生動物管理のあり方の検討に関する委員会幹事、兵庫県立大学自然・環境科学研究所教授）

14:25 市町村レベルでの野生動物管理の実践：

山端 直人（兵庫県立大学自然・環境科学研究所教授・兵庫県森林動物センター主任研究員）

14:50-15:05 休憩

15:05-16:05 リレートーク&討論：「科学的野生動物管理へ：学術からの展望」

日本学術会議第一部・第二部・第三部の会員1～2名ずつ5～6名程度よりそれぞれの研究分野からの展望・提言など

コーディネータ

湯本 貴和（日本学術会議特任連携会員、京都大学霊長類研究所・教授）

16:05-16:15 コメント

林 良博（国立科学博物館館長/兵庫県森林動物研究センター研究統括監）

16:15 閉会の挨拶：

鷺谷 いづみ（日本学術会議連携会員・人口縮小社会における野生動物管理のあり方の検討に関する委員会委員長、中央大学理工学部人間総合理工学学科教授）

（下線の講演者等は、主催委員会委員。リレートーク&討論の登壇者は11月頃決定する。）

日本学術会議九州・沖縄地区会議主催学術講演会
「熊本地震の復興に貢献する熊本大学の学術研究」の開催について

1. 主 催： 日本学術会議九州・沖縄地区会議
2. 共 催： 熊本大学
3. 後 援： 熊本県、熊本市、公益財団法人日本学術協力財団（以上予定）
4. 日 時： 平成 31 年 2 月 27 日（水） 14 時 00 分～16 時 25 分
5. 場 所： 熊本大学工学部百周年記念館（予定）
（熊本市中央区黒髪 2 丁目 39 番 2 号）
6. 開催趣旨： 熊本は、平成 28 年 4 月に、最大震度 7 を 2 度観測する地震が発生し、人的、物的ともに甚大な被害を受けた。
この震災からの復興にあたり、熊本大学は地域に根ざす国立大学として、これまで集積してきた教育研究資源を活用し早期の熊本復興に貢献することを目的に、平成 28 年 6 月に「熊本復興支援プロジェクト」を立ち上げた。地域とともに発展成長してきた熊本大学にとって熊本の復興は最重要課題であり、学術面からの復興支援は大学としての地域貢献への責務である。
そこで、今回、当該プロジェクトの中から、被災文化財のレスキュー事業、熊本城の石垣復旧事業、益城町復興まちづくり支援事業について、熊本の復興に果たした熊本大学の学術的貢献を紹介する。
7. 次 第：

司会進行 慶田 勝彦（九州・沖縄地区会議連携会員、
熊本大学大学院人文社会科学研究部 教授）

 - (1)開会挨拶（14:00～14:10）

日本学術会議副会長 武内 和彦 （14:00～14:05 5 分間）
熊本大学学長 原田 信志 （14:05～14:10 5 分間）
 - (2)講演（14:10～16:15 125 分間）
 - ①『永青文庫細川家史料と地域史料—文化財レスキュー事業の経験から—』
（14:10～14:55 45 分間）
稲葉 継陽（熊本大学永青文庫研究センター 教授）
～ 休憩 ～（14:55～15:05 10 分間）
 - ②『画像処理を用いた石垣照合システムによる熊本城復興支援』
（15:05～15:40 35 分間）
上瀧 剛（大学院先端科学研究部（工学系） 准教授）

③『益城町の復興まちづくりを支援する実践的研究』

(15:40～16:15 35 分間)

円山 琢也 (くまもと水循環・減災研究教育センター 准教授)

※各講演には 5 分間の質疑応答を含む。

(3) 閉会挨拶 (16:15～16:25 10 分間)

君塚 信夫 (日本学術会議第三部会員・九州・沖縄地区会議代表幹事、
九州大学大学院工学研究院 教授)

(下線の登壇者は、主催地区会議所属の会員・連携会員)

国際会議の後援について（2件）

（本件は10月12日開催の国際会議主催等検討分科会、10月24日開催の国際委員会にて承認済。）

1. 政府に対する科学的助言に関する国際ネットワーク第3回会合(INGSA2018)

主催：政府に対する科学的助言に関する国際ネットワーク(INGSA)、
国立研究開発法人科学技術振興機構、国立大学法人政策研究大学院大学

期間：平成30年11月6日(火)～7日(水)（2日間）

場所：国立大学法人政策研究大学院大学（東京都港区）

参加予定国数：40か国・地域

参加予定者数：300人（国外：150人、国内：150人）

テーマ：「Science Advice in a Changing World
（変化する世界における科学的助言）」

2. IEEE WIE International Leadership Summit 2018 Tokyo

主催：IEEE Japan Council Women in Engineering Affinity Group
(IEEE JC WIE)

期間：平成30年11月9日(金)～10日(土)（2日間）

場所：芝浦工業大学芝浦キャンパス（東京都港区）

参加予定国数：6か国・地域

参加予定者数：120人（国外：30人、国内：90人）

テーマ：「My Life, My Career」